

天城町と鹿児島大学との教育研究事業を通した学び

－ 島の青年団、中学生、高校生の育成にこだわる理由 －

鹿児島県天城町保健福祉課 峰岡 あかね

はじめに

今、私が保健福祉課に戻り、保健師として活動をしているが、その傍ら自分の余暇の時間を使って、こだわってやっていることは「島のよさが語れ、それを誇りに思い、自信をもって生きていける、島の将来を担える若者の育成」である。その方法として結シアター手舞であり、結シアター手舞は、島口ミュージカルを通して、中学生・高校生・青年団・保護者・地域住民とのつながり、世代間交流をはかり①文化の継承②人材育成③島の活性化④子ども達のやりがい・居場所づくりを目的に活動している。私が教育委員会社会教育課に平成25年から3年間配属されたときに、この活動が大学との連携事業を通して、私が一番学んだことの実践ともいえる。この報告では、連携事業を通して私が学んだことと、なぜ若者育成にこだわっているのか。私が現在取り組んでいることの意義について明らかにしてみたい。

1. 事業概要

天城町は、平成25年度から平成27年度の3年間にわたり、鹿児島大学生涯学習教育センター（平成27年7月より、かごしまCOCセンター社会貢献・生涯学習部門へ改組）の小栗有子准教授に対して受託研究事業を依頼した。受託研究の実施概要は、下記のとおりである。

- (1) 平成25年度：研究課題「天城町の生涯学習推進計画づくりに向けた基礎調査」
- (2) 平成26年度：研究課題「天城町の生涯学習推進体制の見直しと新たな体制構築の準備」
 - ・前年度に実施した「天城町生涯学習推進計画づくりに向けた基礎調査」の結果を受けて、教育委員会事務局において生涯学習推進体制の見直しと改革案づくりを行う
 - ・全10回の教育委員会ワークショップを行う
- (3) 平成27年度：研究課題「天城町教育行政改革実行計画の作成と実施体制の整備」

- ・前年度に実施した天城町教育委員会ワークショップで検討した内容を「天城町教育行政改革実行計画（案）」（以下、改革案）として取りまとめ、行政計画（第1次天城町教育振興計画）として実効性のある計画につなぎ、平成28年度に天城町教育文化振興の新たな組織体制に移行準備を行う。
- ・全23回の教育委員会ワークショップと全13回のスカイプ会議にて「天城町教育行政改革実行計画（素案）」を作成。

2. 1年目のヒアリングとデータ分析から学んだこと

(1) 個人ではなし得ない、地域の底力を知る～14区長のヒアリングから～

区長にその集落がその土地で何を作っていたのか、どこで水を汲んできていたのか、どこで子どもたち遊んでいたのかなどの生活について、またその集落の行事や歴史を語ってもらった。一人につき2時間、長い時は3時間。それぞれの集落には特徴があり、話を聞いているだけでも興味深く、区長たちの集落に対する熱い想いが聞けた。保健師活動では、個人の背景について考え、活動に結びつけていたが、地域の背景についてはこのヒアリングで初めて知ることができ、地域の底力も感じられた。自分の今までの活動が地域全体をとらえていないということにも気が付いた。

(2) 地域を知らんと人づくりはできない～盛岡元教育長を中心としたヒアリングから～

①盛岡教育長の話

天城町教育文化振興の町宣言をした背景をその当時の教育長、盛岡氏に聞き取りをした。天城町教育文化振興の町とは、平成元年に「家庭・地域・学校の主体的実践と賢密な連携のもと、新たな時代に雄飛する島の担い手となる人間づくりと薫り高い文化の町づくりの推進を目的」として全町民をあげて児童生徒の学力向上と青少年健全育成に取

り組むことの宣言とその組織体制のこと指す。

まず、盛岡氏が就任してすぐに行ったことは、天城町の現状を把握するため、朝早くから各集落に出向き、集落の空気を感じ、教育課題を明確することだったという。その上で、天城町教育構想を練り、課題解決の総合5カ年計画を策定した。とくに問題だったのは学力だった。奄美群島は県内で学力が下位に位置し、その中でも天城町の学力は下位であった。しかし、学力の問題はただ単に学校や児童生徒だけの問題ではない。家庭・地域の問題でもあり、学校・家庭・地域の三者が連携して取り組まなければ学力はあがらないと考えた。このような問題意識や考え方は、国や県が先行して推進した施策とも連動している。ただし、村おこしや地域づくりへの期待はより切実で、人間の生き様のもととなる思いや助け合い、地域における一体感が薄れている社会状況への危機意識は、教育文化振興の町宣言を行う強い動機になっている。

この時提唱されたO S O S運動は、国が進める村づくり運動とその反省をヒントにして、学校づくり、地域づくり、家庭づくりの運動を起こす一つ手段として構想され、取り組んできた。その地域づくりの一貫として、毎月第3日曜日はクリーン作戦の日として集落民あげて、集落の清掃を行う。この活動を通して集落の人たち相互作用し、成長するために設定されたと。しかし、今は、清掃することが目的となっており、当時の思いが十分に受け継がれていない。

② 盛岡元教育長時代の教育行政職員の話

また、その当時の職員に聞き取りをすると、今の社会教育のあり方に疑問をもつ。例えば、社会教育の方針について、4月に方針を公開するためには3月議会の前にやっていた。予算が絡むので、1月中には課内協議し、2月頃に教育委員や教育長を交えて、方針を固め、3月議会では決定していた。今は、現年度に作成し始め、早くても夏頃にしか公開できず、中身はほとんど議論されないままで、形骸化している状況である。4月には公開できるようにまずは努めなければいけない。

職員の打ち合わせも頻繁にあり、話し合いはほとんど何度でも行っていたようだ。そういう中で職員が成長していったと。行事一つにしても、その行事を作り上げる過程をととても大切にしていた。人を集め、話し合いを重ね、その作用で人は成長し、行事の成功で達成感を味わう。住民の声を聞き、地域に足を運び、人とのコミュニケーションを常にとる。何かやるときは実行委員会や何らかの委員た

ちと会合を持ち、一緒に活動する仲間を増やしていった。それは、一人の力は限られているからで、うまく住民を巻き込んでやっていた。いろんな難儀があったようだが、その分相手も答えてくれた。

今の社会教育は、行事をすることで精一杯で、どれだけ無駄を省き行事を行うかに力量がそそがれている。実際やっている行事もほぼ前例踏襲で、こなせばよいという感じである。地域を歩いていない、歩いていないから分析もできない。分析をしないから課題も見えない。課題が見えないからやるべきこともみえてこないということを痛感した。

(3) 初めて聞く、地域で暮らす高校生の想い ～樟南第二高校生のヒアリングから～

次に私にとって大きな収穫は、樟南第二高校の生徒に話を聞く機会があったこと。じっくり6名の高校生とグループワーク形式で対話をした。その中で、高校生たちは地域で活躍したいけれどする場所がない、単車を乗り回して怒られることはあっても褒められる機会がない、子ども会活動は小学生がすること、自分たちは何か地域のためにやりたいが方法も分からない。お願いされたら喜んでやるという、熱い思いが聞けた。私は、高校生がこのような想いを抱いていることに感動を覚えた。そして、これは何かしかけなければと思った。

(4) 20年前まで地域の中に高校生の活躍の場があった

～樟南第二高校の牧園校長のヒアリングから～

また、ヒアリングをしながら、「ユイわく」という言葉をよく耳にした。「ユイわく」とは、近隣の人や親戚など数名でグループを作り、今日はこの人の畑で作業、明日はあの人の畑で作業とグループの人で助け合って、支え合って農作業をすること。結果、生活でも助け合いの精神が育まれ、人と人のつながりは深かった。若者ももちろん、学校が終わってさとうきびを運搬する際の力仕事で重宝されていた。昔の生活では、「ユイわく」は当たり前のことだった。しかし、農作業も機械化となり、農作業を通して地域とつながっていた人々はもちろん、若者達が自然と地域の中での活躍の場が少なくなり、地域のどこに中高生や若者がいるのかわかりづらくなった。

(5) 根拠をもって天城町の過去を知る ～基礎調査のデータ分析から～

保健師活動には地区診断という、その地区の健康問題に対して、分析評価し、どのようにアプローチをしていくか

という手法がある。今回の生涯学習に関わる分野で、何を分析し、何ををもって評価なのか。教育文化振興の町や生涯学習推進会議、2つとも明確な指標がないだけにすごく難しいように感じた。まずは膨大な量の様々な分野のデータを集め、小栗准教授が分析した。教育行政要覧については、S 59～H25年までの内容の経年変化を行った。また、土地整備や歳入歳出決算書、財政分析などで、土地整備は農業所得の変化につながり、財政分析はどの時点でどのような事業があり、財政が苦しくなってから社会教育事業の変化など、後々に分かることも多く、分析・評価なくしては次の展開に発展しないのでとても重要な作業である。保健師活動でも応用できそうなことである。

3. 2年目と3年目のワークショップを通して学んだこと

(1) 同じ志の仲間ができた

教育委員会の他の職員は、ヒアリングには同行していないことから、ワークショップを通して社会教育とは何かを学べ、共通理解が得られた。

(2) 社会教育の仕事とは何かを知る

行事が目的ではなく、その行事までの過程で、人と人との相互作用で成長する手助け、支援をすることである。地域の声を聞いて、ボトムアップ方式で行事を行わなければ住民に響きにくく、成長には結びつきにくい。

(3) 教育行政が変わろうとしなければ何もかわらない

住民の声を拾い上げようとしなければ何もかわらない。拾い上げられる機会は、天城町の条例・規則で定める審議会（7つ）委員会や教育文化振興の町の下部組織である地区推進協議会などがあり、それをうまく活用できていない。また、団体育成についてもその団体が抱えている課題について、寄り添って考え、その団体が持っている力で解決できるように導くのが社会教育の仕事で団体運営の肩代わりをしてしまうと、行政頼みになってしまい、結果団体も人も育たず、団体が衰退・解散してしまうという事態になる。教育行政の大きな指針は人づくりであり、学校教育は学力向上を重要視している中で、社会教育は学校教育では対応できない子どもから大人までを対象とした人づくりをもっと意識しなければ、毎年100人以上の人口が減っている中で、ますます団体運営や集落の運営が厳しくなり、最終的に町の衰退にもつながる。

(4) 時代にあったやり方をする必要性

ワークショップで最初にやったのは教育文化振興の町が今の時代にあっていいのかを検証することであった。そこでわかったことは、地域のつながりではなく、目的別で広域化のつながりに変わってきているということだった。この変化は青年団においても同じ事が言えることに気が付いた。つまり、人と人のつながりが地域から目的別で広域的になることで影響は集落青年団にも及んでいる。というのは、ヒアリングの中で多くの人が昔の青年団の活動について、祭や集落行事など青年団が主催し、多いに盛り上がっていたと。昔のように青年団が活発になって集落や地域を盛り上げて欲しいという願いをたくさん聞く。しかし、集落青年団活動も集落に差はあるが、衰退してきており、上部組織であった天城町連合青年団が成立しなくなった。見方替えて言えば、青年団にこだわらずとも広域的に自分の好きなことでつながれる仲間が作れ、町連合青年団がやらなければならない役割、昔で言うと秋利神マラソンや夕焼けソフト大会など連合青年団が主催して行っていた行事も無くなり、存在し続ける理由がなくなってしまったともいえる。

4. 学びから実践へ

(1) 連合青年団の立ち上げ

私が社会教育課に配属され、上司に言われたのが連合青年団の立ち上げであった。当時、郡内で連合青年団が存在しないのは天城町だけであった。町としても若いパワーで活気づけてほしいという思いがあった。小栗准教授と地域を歩く中で地域の声を日常生活でアンテナを張って拾うことを心がけ、どうしたらよいのか思案していた。

すると、「あそこの誰々が青年団で何かしたいと言っていたよ」「仲間内だけじゃなくおもしろいことを企画し、開催している若者がいるよ」などの情報が入ってきた。そこで、まずは集落にこだわらず、そういう若者達に声をかけ、集まってもらい交流会をした。その中から若者で何かしようやと連合青年団が結成されたのが平成25年9月であった。祭りの屋台出店を中心に、奄美群島日本復帰60周年記念の奄美群島青年団主催の祭りに参加、3町連合青年団交流会、群島女子研修会、婚活パーティー、クリーン作戦などを開催し、月に一度は会合を持つようにしていた。しかし、連合青年団の核となる活動が見いだせずにいた。

(2)「結シアター手舞」の発足

ちょうどそのころ、平成27年に鹿児島で開催される国民文化祭（以下国文祭と記す）の天城町事業が動き出した。国文祭は事業費の8割が県から補助されるというまたとないうチャンス。天城町のテーマは「方言」であり、何をすればよいのか困っていた。実行委員会を発足し、ヒアリングの中で出てきた地域のアイデアマン達、青年団にまずは委員になってもらった。「方言」をテーマに何をするのか、喧々譁々、3回ほど話し合いを兼ねた後、委員の一人が沖縄で中高生が地元の歴史にミュージカルにして、地域興しをやっているから、それを手本にしてはどうかと意見があった。

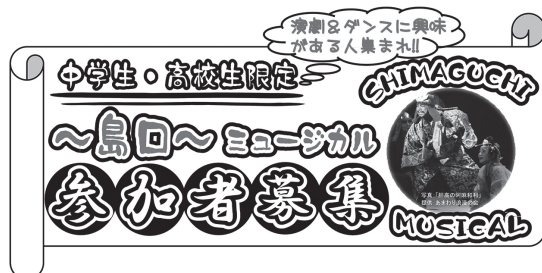
その時、ヒアリングで高校生が言っていた言葉を思い出し、高校生の活躍する場につなげられないか。まずは、沖縄の舞台を見に行き、これは天城町でもできるのではないかと、やらねばと。ただし、私だけが観て感動し、やりたいと思っても一人でやれるものではない。そこで、天城町連合青年団メンバーに相談し、一緒に沖縄に行き、舞台を観て賛同が得られたため、再び、委員で話し合い、樟南第二高校に相談した。その後、樟南の文化祭、当時の商業

科二年一組が空手や琉球舞踊を取り込んだダンスに挑戦し、1・2年生全員で体育祭でも披露、そして町内全域の中高生に“島口ミュージカルをやりませんか”と参加を募る。中高生21名で“結シアター手舞”が発足する。

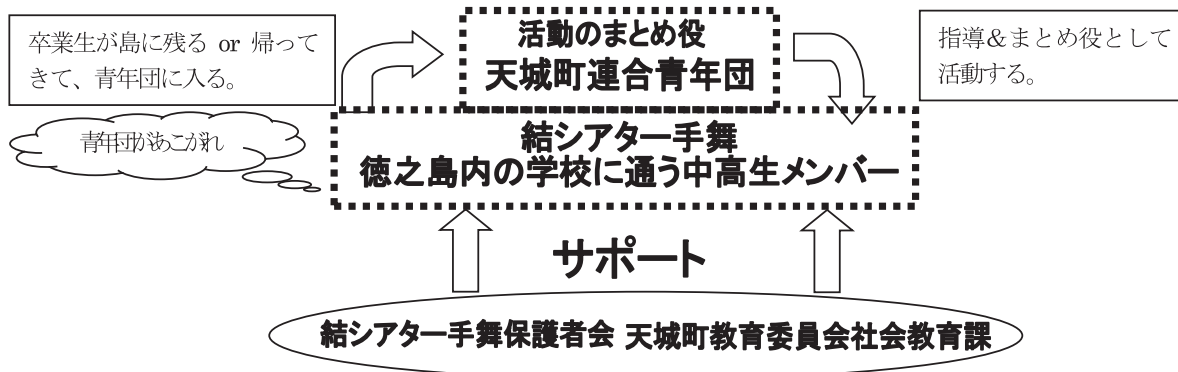
そして、サポーターとして天城町連合青年団が衣装づくり、伝統芸能や闘牛のシーンなどを作りあげた。沖縄から演出家などの指導者を呼び、指導者としてのノウハウを青年団が学びつつ、今は日頃の練習を青年団が指導して活動している。青年団の継続と後輩育成、異年齢交流による人材育成、さらには若者の大半が高校卒業後、島外へ出てしまうため、若者流出に歯止めをかけ帰島するきっかけになればと考えている。

5. まとめ—なぜ、島の若者育成にこだわるのか

私がなぜ、青年団や中学生・高校生といった若者にこだわっているのか。それは、私が高校1年生の時、阪神淡路大震災で被災し、徳之島に移住してきて、島の人とのつながり・深さに感銘を受けたからだ。もともと、両親共に徳



1. 主な活動内容 ※ 演劇 & ダンスの経験がなくても大丈夫!!	平成27年11月1日(日)第30回国民文化祭かごしま2015天城町主催事業“方言フェスタ in とく の し ま”で行う、天城の歴史・文化・島唄・芸能を取り入れた島口ミュージカル「西郷隆盛と徳之島」(仮称)への出演に向けた活動。 ※700円は、沖縄県において観客延べ14万人以上動員し、今もなお観る者に感動を与え続けている現代版組踊「肝高の阿麻和利」を生み出したTAO Factory(タオファクトリー)さんに天城のオリジナル舞台の制作・演出を依頼しています!
2. 対象	天城町在住 あるいは 天城町内の中学校・高校に通う 中学生1年生から高校3年生までの男女



之島出身ではあるが、高校卒業後島外に出て、平成7年まで関西に住んでいた。私は両親が徳之島をこよなく愛し、島のためにという想いを抱いているのを小さいころから感じながら育ち、実際徳之島に住んで都会にはない、人々とのつながり、あたたかさ、人の純粋さを肌で感じた。私も島を大好きな人を増やしたい、大好きな島を後世に残したいと思うようになった。そして、こうした想いを育むのは子ども・若者世代が一番適しており、響きやすく、この世代が変わることの影響力ははかりしれないと考えるからである。

人口減少は町が衰退する大きな要因である。なので、人口減少を少しでも食い止めなければならない。しかし、高校卒業後、9割が島外へ出て行き、流出した若者のほとんどが島に帰ってこない。ならば、若者達が帰ってきたいと思える島づくりが重要であり、島を好きでないと帰島し、定住することは難しい。島を好きな子どもを育てる方法として島の文化やよさ、つながりにふれあえる結シアター手舞が行う「島口ミュージカル活動」は一つの手段である。この活動を通して、島の良さを語れ、PRできる人づくりと人をまとめあげ、牽引できるリーダーの育成をしている。

鹿大との連携事業を通して分かったことは、昔はユイ枠の生活中で、必然的に人が育ち、まとめ上げるリーダーが育っていた。また、各集落にリーダーとなりうる教員OBなどがたくさんおり、リーダーを意識的に育てなくても集落の中にいた。そして、昔は青年団長になれることはステータスであり、若者のあこがれでもあった。今は区長や青年団長に至っては昔のようなあこがれもなく、なかなか担い手がない状況で教員OBも減り、ライフスタイルや人とのつながり方、価値観も変化している。そのような状況の中で、時代に合ったやり方で人材育成をやらなければ、後世に島を残していけない。島を発展させるには一番は人がいることであり、人づくりだと感じる。

国文祭の事業はトップダウンではあったが、結シアター手舞に関しては、青年団や保護者を巻き込んだ結果、それぞれが役割分担し責任をもって活動している。今もなお、自主活動として盛り上がり、自分たちからやりたいという「内発的」な活動に変化していることからそれぞれがやりがいを感じている。これは、私一人の力ではなしえない、中高生、青年団、保護者、地域とが関わり、その相互作用で生まれた変化である。今までにはない試みで中高生も青年団も保護者もどうなるのだろうという不安はあっ

たが、1つの事に向かってみんなで取り組み、成功させたという達成感は計り知れなく、それが結シアター手舞メンバーと関係者の自信となり、地域活性化に貢献したいという気持ちを醸成することにつながっている。そして、今年三月で18人の結シアター手舞の卒業生を送り出した。その大半が将来、島に貢献するためにそれぞれ目標を持ってがんばっており、後輩達の指導・支援も一生懸命行っている。少しずつではあるが、島の将来を担う人を育てる一助になっているのではないかなと思う。

おわりに

この事業を通して考えたことは、昔は生活の中で生きていくためのさまざまなことを学び、伝えていた。しかし、今の時代は意識して、生きる力を育むためにすべきことを考えなければならない。変化の激しい社会を生きぬくために自ら考え、判断し、表現する方法、他者を思いやり、感謝し、人間関係を築く方法、健康・体力づくりを自分でできる方法、これらの方法がどうやったら身につけられるのか。先ほども述べたように、結シアター手舞の活動は一手段にしかすぎない。この活動で、町民すべての生きる力を育むことは不可能である。ただ、この活動により物事がその時代に合ったものに変化させ、受け入れていく必要があることを理解されていくきっかけになればと期待する。最後に私ができること、保健師だから教育委員会職員だからではなく、行政職員として、また地域を担っていく一員として、お互いの声を聞き、広い視野をもって、人や物をつなげ、自分たちの力で幸せに生活できるように共に学び、歩み、努力し、成長していく。

今回、この事業について、ご尽力いただいた小栗有子准教授に心から感謝申し上げます。